

第7章

京都岡崎の文化的景観の本質的価値

第1章から第5章までの各章では、京都岡崎の文化的景観を構成する諸側面を各主題に分けて分析した。さらに第6章では、各章における議論をもとに、京都岡崎の文化的景観の構造をその全体性の下に示した上で、景観単位を区分するとともに、調査によって特定された文化的景観の構成要素を提示した。

こうした一連の検討を総括し、本報告書における成果を概括するため、本章では京都岡崎の文化的景観を構成する本質的価値について論じ、京都岡崎における文化的景観の保存に向けた足がかりとしたい。

1. 本質的価値Ⅰ —景勝ヒンターランド としての場所性・象徴性

「景勝ヒンターランド」という語の意味するところについては、すでに第2章において指摘されたとおりである。そこでは、京都岡崎という地域は、平安京・京都の政治的・経済的・社会的・文化的・宗教的な影響が強く及ぶ地域であったが、「受け身」ではなく「支える」ヒンターランド、首都機能を補完する地域として位置づけられた。

平安時代には東山山荘や白河殿などの多くの別業が営まれた。そして、8世紀中葉頃には別荘は寺院へと転換され、東山山麓の景勝地には禅林寺（永観堂）などに代表される寺院が営まれる。

さらに11世紀になると、法勝寺等の六勝寺に代表される大規模寺院が建立され、院政期の白河殿とともに副都心としての岡崎という位置づけを確立した。

さらに、鎌倉時代には、岡崎は東海道の出入口ともなり、交通の要衝としての機能も帯びることとなった。また、正応4年（1291）には南禅寺も創建され、都への入口を防御する役割も担った。

しかし、室町時代になると嵯峨など西方の周縁地域が重視されるようになり、岡崎一帯は都市から農村へのベクトルを向き始める。そして、応仁の乱によりその流れは決定的となり、近郊農村としての位置づけ、性格を帯びることとなった。ただし、東海道の出入口としての交通の要衝という役割は継続しており、東海道を重視した江戸幕府の統治下ではその役割は一層高まった。

また、江戸時代には檀王法林寺の再興（慶長16＝1611年）や頂妙寺の移転（寛文13＝1673年）などによって岡崎一帯は宗教的色彩を高めることとなった。とくに、宝永5年（1708）の京中大火では、焼失した禁裏の南の町々と多数の寺院が岡

崎に集団移転した。これが、現在も川東二条の地域に存在する寺町の形成への契機となった。

近世を通じた近郊農村としての岡崎の役割が大きく変化したのは、幕末の動乱期における彦根・阿波・安芸・越前・加賀等の大規模藩邸の建設であった。これにより、再び都市的機能を取り戻すこととなった。藩邸は、その後の明治維新、大政奉還によって取り壊されることとなったが、東京奠都以後、琵琶湖疏水の開削、内国勸業博覧会の実施、平安神宮の建設等により、京都の近代化と対応して岡崎も大きな役割を担うこととなった。そのなかでは、疏水を利用した文化や社会経済（生業）の成立、勸業・文教地域としての位置づけなど、現在まで継承される岡崎の社会的、文化的性格も規定されることとなった。

いずれにせよ、京都において岡崎は、政治的・社会的中心域との関係のなかで、有形・無形の文化が形成されてきたことは通史的に位置づけられることである。近代に生じたさまざまな変化や潮流もそうした歴史的基盤に即したものであり、「景勝ヒンターランドとしての場所性・象徴性」は古代から現代まで一貫して、京都岡崎という地域に根づく性格であると考えることができる。

2. 本質的価値Ⅱ —白川・琵琶湖疏水による 持続的・複合的水利用

明治時代の琵琶湖疏水開削以後、岡崎界限では多くの用途で水資源が利用されたことは、すでに本文中で指摘されたところである。

まず、第5章第5節にて指摘された疏水園池は庭園という文化的側面に大きな影響を与えた。それぞれの園池において疏水本線、分線及び扇ダム放水路などを通じての取水が行われ、庭園文化が形成された。

こうした疏水園池では琵琶湖由来の生態系の一端を確認することができ、そのなかにはイチモンジタナゴに代表されるような、琵琶湖では既に絶滅したと考えられている種も疏水園池には生息していることが調査の結果から明らかになった。したがって、疏水園池は文化的な観点からの重要性とともに、生態学的な観点からも現代的な価値がみいだせう。

他方で、琵琶湖疏水に由来する水資源を生業に利用し、多くの生業が成立し、そうした生業は現在もお継承され続けているという側面も重視する必要がある。すでに、冒頭に述べた価値の全体像においても指摘したとおり、疏水からもたらされた水を動力として水車を動かし、製麦や精米、伸銅、製材などに代表される産業を形成した。大正から戦前の地域経済を考えるうえで、これらの諸産業は大きな役割を果たした。

なお、疏水は発電にも用いられた。夷川発電所および蹴上発電所における水力発電による電力は、生業にかかる動力の転換、また社会的環境変化のなかで大きな役割を果たした。

このように白川・琵琶湖疏水による水資源は複合的に利用されてきたと位置づけることができる。そして、すでに価値の全体像において捉えたように、疏水と地域の関係性は岡崎という地域の文化的景観を考えるうえで象徴的に理解される。そうしたなかで、ここで指摘した「持続的・複合的水利用」という価値の在り方は重要性を帯びるのである。

3. 本質的価値Ⅲ —反復的大規模土地利用に よって生まれた地域構造

本質的価値Ⅰ「景勝ヒンターランドとしての場所性・象徴性」において指摘した通り、京都岡崎の土地利用の特徴のひとつは、都市的性格と農村的性格を歴史的に繰り返すという点によって理解される。

そうしたなかで、都市的性格へと転換するにあたり、それぞれの段階において大規模開発が進行することとなる。つまり、古代における別業の開発や六勝寺の建立、江戸時代における川東二条の寺町の形成、幕末の大規模藩邸の建設、近代の琵琶

湖疏水開削や第4回内国勸業博覧会開催に伴う会場開発、さらには内国勸業博覧会後の跡地利用としての岡崎公園（及び文教施設）の建設などが挙げられる。都市へのベクトルと農村へのベクトルの反復のなかで、大規模な土地利用が繰り返される。こうした過程は、第6章第2節図4に示された古代を中心とした寺院跡のうえに、近代に由来する多くの構成要素（第1図参照）が立地していることなどから、地図上でも確認することができる。

そして、大規模土地利用が反復的になされてきたということに、岡崎という地域に対する認識が史的に一貫してなされてきた証左として理解することができる。

4. 価値の全体像 —「園池」としての都市景観

以上描出した3項目の本質的価値を包括する価値の全体像として、「園池」の概念を提示したい。

平安後期に白河街区に設けられたのは、園池式伽藍を持つ寺院や池を有する別荘などであった。その後間を置いて、南禅寺旧境内をはじめ岡崎一帯に疏水の水を引いた園池が設けられた。岡崎の歴史を通じて、園池は、景勝の地としてのこの一帯を象徴する存在であり続けている。

物理的要素としての園池そのものだけではなく、この地の特性を比喩的に「園」と「池」とみなすこともできるだろう。大きな空地を有する大規模な敷地が反復的に展開してきたことを、この地が常に「園」であった、と言い換えることができるかもしれない。平安時代の園池式伽藍はいくまでもなく、中世の農村化した時期も、生産と文化の源としての「園」であったとみなすことができる。近代の博覧会場、そして岡崎公園もまさに都市文化が花開いた「園」であった。東山への眺望も、この地を「園」と認識させる、欠かせない要素である。

白川と琵琶湖疏水の持続的・複合的水利用は、いわばこの地を水の都市としたといえるだろう。ひとと水の距離が近く、常に水とともにあるこの地の景観的特質を、「池」の語に込めることができるかもしれない。庭園内の池がこの地の景観を象徴するのはもちろんのこと、生業における水利

用も水との距離の近さをもたらしている。さらにいえば、疏水の水面がつくり出す視覚的な景観自体も、一種の「池」と呼べるだろう。

「園」と「池」は、個々の施設の中に留まらずに、岡崎地域全体に及んでいる。都市でありながら園池でもあるこの地域の文化的景観は、いわば「園池」としての都市景観と捉えるべきものである。

5. おわりに

本報告書におけるさまざまな観点からの検討にもとづき、京都岡崎の文化的景観の本質的価値を本章に示した3つの概念によって提示した。そして、これらの価値を包括する全体像として、「園池都市」という概念をここに提案した。

今日目に見える要素を軸に京都岡崎の文化的景観を考えると、その構成要素の多くが近代以降の要素に偏在することとなる。しかし、そこに琵琶湖疏水を開削し、また内国勸業博覧会を開催せしめた社会的、文化的基盤は、それ以前から積み重ねられてきた地域の特質、つまり景勝ヒンターランドとしての場所性・象徴性や反復的大規模土地利用によって生まれた地域構造にある。したがっ

て、京都岡崎の文化的景観の本質的価値を形成しているのは、決して近代以降のみならず、古代以降のさまざまな歴史的動態のもとに成り立ったものであるということを改めて繰り返しておきたい。

そのうえで、よりミクロな観点で捉えれば、近代以降の歴史の証左ともいえる諸要素、とくに水に関連した生業などの記憶などが急激に失われつつあることに着目せねばならない。マクロなスケールのなかでの価値構造と地域のコンテキストを踏まえつつ、それぞれの構成要素、換言すればモノに内包される地域の記憶の継承を積極的に果たしていく必要がある。それこそ文化的景観の保存にほかならない。

本報告書で示した価値調査とその成果は、マクロなレベルでの本質的価値を捉え、描き出すとともに、それらを現代に伝える諸要素を構成要素として特定した。

そのなかで、何をどのように保護し、地域の記憶を継承するのか、そして結果として文化的景観の本質的価値を保存するのか。保存計画では、本調査で得られた成果を十二分に踏まえつつ、こうした点について検討していくことが求められている。
(奈良文化財研究所景観研究室)



第2図 「京都岡崎の文化的景観」全覧図